

## 日本がん疫学研究会



瀬木三雄先生

## ——瀬木三雄先生——

日本を訪れた外国の学者たちは、異口同音に Dr. Segiに会いたいと言う。

いつもにこやかに研究室にお客を招じられ、大家、若輩を問わず、いつも新しく印刷された hot な data を手渡されながら、要点をとつとつと説明された。

お客がもたらす新しい情報には静かに耳を傾けられ、ノートをとられるわけでもないのに、本物とまがいを敏感にかぎわけられて、数ヶ月の後には新しい知識をまじえた印刷物ができ、さりげなく知人に配布された。記録好きの先生は記念撮影もお好きだった。

あまり口数は多くない先生も、ここぞという学問の討議では、どこにそんな情熱が、と思われるほど、力づく所信を述べられた。

若き日の研究の revival に眼を輝かされて新しい学問のために骨おしみのない努力をされ、学恩という単語を復活された。

先生はいまはない。

地球のあなたこなたから、“Great loss of humankind” の弔電が巨星のおちた街にまいおりました。

昭和57年5月8日(土) 御逝去 満74才

死因一心筋硬塞(冠動脈硬化症)

ここに謹んで先生の御冥福をお祈り申し上げます。(K.A.)

News Cast発刊にあたって  
日本がん疫学研究会とは

わが国の平均寿命は、1981年男73.79才、女79.13才となり、世界第一になりましたが、今後その伸びは死因第一位となったがん問題の解決にあるといわれております。したがって、人がんの原因を究明し、がんを回避・予防する上で疫学の役割はますます大となって参りました。

こうした社会的背景をふまえ、昭和52年12月に名古屋で第一回のがん疫学研究会が開かれ、その後毎年研究会を重ねてきました。昭和56年6月、第4回研究会が埼玉がんセンターで開催された折、研究会の一層の発展を図るため、この研究会を全国的組織として正式に発足させることになりました。発起人はそれまで研究会の世話人をつとめた平山雄、藤本伊三郎、久保利夫、青木国雄、富永祐民であります。

幸い全国各地のがん研究者の御参加をえて本研究会が成立しました。第5回研究会が広島で栗原登教授(広島大)、加藤寛夫放射線疫学部長の世話人で開かれた折、News letterの発刊がきまり、ここに第1号をお届けする次第であります。本会の会則を次頁にそえました。多数の御参加を念じております。

(K.A., S.T.)

## 第5回 がん疫学研究会開かる

## 1. 開催に至る経過

昭和56年6月の第4回研究会(埼玉県立がんセンター)に先立って、昭程57年開催の第5回研究会の世話人として加藤寛夫(放射線影響研究所)、栗原登(広島大学原爆放射能医学研究所)に依頼がなされた。協議の結果、主題を「がん研究における生物学と統計学との接近」として引受けることにし、昭和56年10月30日の幹事会に出席し、当方の試案を提示して意見を承った。会員制による研究会が組織されたので今回は全会員に課題を示して演題を募集したいとする提案が承認され、又、開催地の特徴を生かして「放射線発癌」、「組織登録」を課題とすることが要請されて了承した。その結果、プログラムの如き3課題を原案とし、昭和56年11月10、11日の厚生省富永班会議の席において参加者の意見を頂き、原案通り進めることとした。

昭和57年1月20日に演題募集案内を発送、3月末日切、5月10日にプログラム発送。

特別講演としては、主題の「生物学」の立場から、癌研の菅野所長に「癌の自然史」関連の講演を依頼し、最終的には「基本癌と変動癌」の演題で引受けて頂くことができた。

又、たまたま来日予定のDr. B. E. Hendersonに、中国における最近の知見を特別講演として聞かせて頂くことができた。

## 2. プログラム(次頁に別掲)

## 3. 参加者

●会員 56名(当日入会を含む) ●会員以外 32名 ●合計88名

## 4. 研究会を顧みて

本研究会が会員制によって組織されたのを機会として、口演演題を全会員から募集するという方式を試みたいという私共世話人の希望を快く受入れて頂きましたが、当方が決めた課題に果して応募して頂けるかどうかの懸念を抱きながら進めました。結果は予想を上廻る応募があり、むしろ時間の制約によってプログラム編成に苦心したという状況であり、結局は昼食をとりながら総会議事を行うような非健康的な運営となってしまいました。

菅野所長の特別講演については、御都合により、原稿を頂いて印刷物として配布することはできませんでした。「ヒト癌の自然史、日病会誌69巻P27~57、昭55」にかなり詳しく掲載されていますので参考として下さい。

なお今回は、閉会時刻と多くの会員の帰途列車等の時刻との関係で、割愛せざるをえませんでした。会員特に若い研究者の方々による忌憚のない議論のできる場として、全員懇親会が持たれることを今後に期待したいと思います。

(執筆:栗原 登)

# 日本がん疫学研究会会則

## 第一章 名称

第1条 本会は日本がん疫学研究会 (The Japanese Society of Cancer Epidemiology) と称する。

## 第二章 目的および事業

第2条 本会はがんの疫学の理論と実践の進歩発展を図ることを目的とする。

第3条 本会は前条の目的を達成するために、次の事業を行う。

1. 原則として年1回学術集会および総会を開催し記録を作成する。
2. その他本会の目的を達成するために必要な事業 (例えば、研修会の開催、特別委員会の設置など) を行う。

## 第三章 会員

第4条 本会の会員は一般会員、顧問会員、賛助会員の三者とする。

第5条 一般会員はがんの疫学および関連領域の活動に従事する者で、本会の入会を希望し、所定の申込み手続きをとり、年会費を納めた者とする。

第6条 顧問会員はがんの疫学の関連領域の研究に造詣の深い者で、一般会員の推薦を受け、幹事会の承認を得た者とし、本会の代表者が委嘱する。

第7条 賛助会員は本会の主旨に賛同し、賛助会費一口以上を納める者とする。

## 第四章 会費

第8条 会費は一般会員年2,000円、賛助会員年一口50,000円とする。顧問会員は会費の納入を免除される。年会費のほか、入会時には入会費1,000円を納めるものとする。

第9条 会計年度は4月1日から翌年3月31日までとし、本会の代表者は会計報告を行うものとする。

## 第五章 役員

第10条 本会に次の役員を置く。

代表幹事 1名  
幹事 若干名  
監事 2名

第11条 代表幹事は本会を代表し、幹事会の開催ほか会務を主宰する。

代表幹事の選出は幹事の互選による。

第12条 幹事は代表幹事を補佐し、本会の運営を行う。

幹事の選出は一般会員の互選による。

第13条 監事は代表幹事が委嘱し、会計を監査する。

- 第14条
1. 役員の任期は2年とし、再任することができる。
  2. 役員は任期が満了しても、後任者の選出を行うまではその職務を続行しなければならない。

## 第六章 会長

第15条 代表幹事は幹事会の推薦により会長を委嘱する。

第16条 会長は学術集会およびその他の事業を主宰する。

第17条 会長の任期は次回の学術集会開催までとする。

## 第七章 事務局

第18条 本会の事務局を下記に置く。

名古屋市千種区田代町鹿子殿81-1159

愛知県がんセンター研究所疫学部内

## 付 則

1. 本会の会則を変更するには幹事会および総会の承認を得なければならない。
2. 本会則は昭和56年7月1日より施行する。

## 参 考

第1回改訂： 昭和57年6月11日

第六章の世話人を会長に変更する。

## 日本癌疫学研究会 幹事 監事 顧問会員

1) 幹事 若干名

三宅浩次/札幌医大公衆衛生 久道 茂/東北大公衆衛生 加美山茂利/秋田大公衆衛生 柳川 洋/自治医大公衆衛生 久保利夫\*/埼玉がんセンター疫学 村田 紀/放射線医学研究所 平山 雄\*\*/国立がんセンター疫学 渡辺 宏/新潟県新津保健所 青木國雄\*/名古屋大予防医学 富永祐民\*/愛知がんセンター疫学 大島 明大阪府立成人病センター調査部 渡辺嶺男/鳥取県健康対策協議会 栗原 登/広島大原医疫学・社会医学 加藤寛夫/放射線影響疫学統計部 中村健一/高知医大衛生 倉恒匡徳/九州大公衆衛生 重松峻夫/福岡大学公衆衛生 廣畑富雄/久留米大公衆衛生

2) 監事 2名

藤本伊三郎 大阪府立成人病センター調査部  
大野良之 名古屋大予防医学

\* 現幹事・監事  
\*\* 現代表幹事  
(会員名簿は別刷)

3) 顧問会員

重松逸造 放射線影響研究所理事長  
山本俊一 東京大衛生学  
菅野晴夫 癌研究会研究所長

## 第5回 日本がん疫学研究会

——がん研究における生物学と統計学との接近——

昭和57年6月11日(金) 世話人 栗原 登(広島大・原医研)  
広島医師会館(3階 健康教育室) 加藤寛夫(放射研)

1. 疫学に用いられる統計的手法 A. コホート調査 (1)コホート調査に用いられるレコードリンケージの電算機処理(10分)○早川式彦他(広島大・原医研) (2)コホート研究におけるCoxの重回帰型生命表法の有用性(10分)○清水弘之他(愛知がんセンター)追加発言:清水由紀子(放射研)(3分) (3)コホート調査に基づくがんの疫学的研究(10分)平山雄(国立がんセンター) 特別講演 I 基本癌と変動癌 菅野晴夫(癌研究所) 特別講演 II The etiology of cancer of the liver and nasopharynx in Chinese Brian E. Henderson (University of Southern California)
- B. ケース・コントロール調査(4) 補正相対危険度<sup>2</sup>推定のためのmultivariate conditional logistic analysisの応用—食道癌を例として—○岡田啓他(名古屋大・予防医学他)(5)多変量解析モデル間の有効性の検討○水野正一他(名古屋大・予防医学) (6)沖縄県における食道癌死亡の症例—対

照調査○与那嶺正盛他(埼玉がんセンター他) C. 発癌についての統計学的モデル(7)癌細胞の増殖過程に関する定量的考察—前臨床的期間の長さの推定のための基礎的研究○大瀧慈他(広島大・原医研) (8)出生年コホートに基づいた肺癌死亡の将来予測○浜島信之他(名古屋大・予防医学他) (9)46か国のがん死亡率と食物供給量に関するパス解析○高木廣文他(聖路加看護大・統計学他)

2. 腫瘍組織登録

(10)広島県における組織腫瘍登録の現況○門前徹夫他(広島県腫瘍登録委員会他)追加発言:栗原登(広島大・原医研) (11)長崎における腫瘍組織登録○池田高良他(長崎大・病理学) (12)がんの組織型別統計の長所と短所、胃癌を中心として○久保利夫(埼玉がんセンター) (13)胃癌組織型の生年コホート別観察○久保利夫(埼玉がんセンター)

3. 放射線発癌の疫学

(14)胃集検被曝集団の白血病誘発に関する調査研究○久道茂他(東北大・公衆衛生学他) (15)原爆被爆者の白血病○石丸寅之助(放射研) (16)原爆被爆者の発癌—白血病を除く○加藤寛夫(放射研)

## 研究の動向

### 昭和57年度厚生省がん研究助成金による研究 55-3『がんの疫学的研究』

本研究は分析疫学を中心とした各種の疫学的手法を用いてヒトのがんの発がん要因を明らかにし、ひいてはがんの一次予防を行う方法を見出すことを目的としている。本研究班は12名の班員と11名の研究協力者から成り、食生活要因、喫煙、石綿、放射線などの発がん要因別の研究および、小児がん、脳腫瘍、胃がん、大腸がん、膀胱がん、前立腺がんなどの部位別の疫学的研究を行っている。また、本研究班の共通研究課題として、外部要因として食物を、内部要因として性、年齢をとりあげてそれぞれの立場から研究を行っている。本研究班の構成と研究課題は次のとおりである。

分担研究者	所属施設	分担研究課題
富永 祐民	愛知県がんセンター	消化器がんの比較疫学的研究
平山 雄	国立がんセンター	計画調査にもとづくがんの疫学的研究
袈輪 真澄	国立公衆衛生院	がんの地理病理学的研究
近江 恵子	東京大学医学部	小児がんの疫学的研究
間中 信也	東京大学医学部	脳腫瘍の疫学的研究
広畑 富雄	久留米大学医学部	胃がんの疫学的研究 患者対照調査
大島 明	大阪府立成人病センター	がん登録と記録照合による疫学的研究
青木 国雄	名古屋大学医学部	膀胱がんの疫学的研究
三上理一郎	奈良県立医科大学	肺がんの疫学的研究(石綿曝露を中心に)
土屋 永寿	癌研究会癌研究所	病理組織学にもとづくがんの疫学的研究
加美山茂利	秋田大学医学部	食餌変異に関する疫学的研究
加藤 寛夫	放射線影響研究所	放射線発がんの疫学的研究

## トピックス

### ——コレステロールとビタミンAとがん——

血清コレステロール値とがん発生率が負の関係にあるという疫学研究結果は各地で報ぜられている。Kark、SmithらはビタミンAレベルとがん発生率の関連が主体であって、コレステロールとがんの関係は間接的なものではないかといっている。

ちなみにビタミンAの測定法は決定的なものがないといわれており、尚検討をつづける必要がある。(K・A)

#### 協力研究者

村田 紀	放射線医学総合研究所	発がんの遺伝的要因に関する疫学的研究
木村 正文	国立公衆衛生院	産業別がん死亡率の分析
井上 怜子	神奈川県立成人病センター	地域がん登録にもとづくがんの家集集積の研究
伊藤 洋平	京都大学医学部	EBウイルス関連疾患の実験疫学的研究
渡辺 宏	新潟県新津保健所	新潟県におけるがん死亡の疫学的研究
稲葉 裕	順天堂大学医学部	がんの疫学における多変量解析の研究
徳留 信寛	佐賀医科大学	胃がんの疫学的研究—良性疾患により胃切除を受けた患者の追跡調査
渡辺 決	京都府立医科大学	前立腺がんの疫学的研究
三宅 浩次	札幌医科大学	卵巣がんのケース・コントロール研究
山本 俊一	東京大学医学部	がんの疫学的研究の方法論
福田 勝洋	北海道大学	上顎洞がんの疫学的研究 (主任研究者：富永 祐民)

## がん疫学研究会開催状況

	主 題	記 録 集	備 考
<b>第1回(名古屋)</b> 1977年12月17日 世話人 (平山 雄 古川 俊之 ○富永 祐民)	がんの計量疫学	篠原出版：がんの臨床 別集『がんの計量疫学』 平山 雄 編 55年7月25日刊 3,600円	日本ME学会の計量診断治療研究会(世話人：古川俊之)の例会として開催
<b>第2回(名古屋)</b> 1979年5月27日 世話人 (平山 雄 青木 国雄 ○富永 祐民)	日本人に多いがん、 少ないがん ——その疫学と病態生理——	篠原出版：がんの臨床 別集『がん・日本と世界 ——その動向と病因論』 長与健夫・富永祐民編 55年10月20日刊 6,000円	日本学術会議・癌研連主催学術講演会『がんの頻度とその動向——日本と世界』の翌日開催
<b>第3回(大阪)</b> 1980年6月28日 世話人 (○藤本伊三郎 平山 雄 青木 国雄 富永 祐民)	がん登録の疫学的 意義とその応用	篠原出版：癌の臨床 別集『がん登録と臨床疫学』 藤本伊三郎・大島 明編 56年4月13日刊 3,500円	第3回がん疫学研究会として開催
<b>第4回(埼玉)</b> 1981年6月27日 世話人 (○久保 利夫 平山 雄 青木 国雄 藤本伊三郎 富永 祐民)	が ん 研 究 ——疫学と病理学の接近——	篠原出版：がんの臨床 6月臨時増刊号 特集『がん研究、疫学と病理学の 接近』 vol. 28 No.8, 1982	日本癌疫学研究会として組織化・会則作成

# 第6回 日本がん疫学研究会 開催予定

日本がん疫学研究会  
会長 倉恒 匡徳

第6回日本がん疫学研究会を下記の要領で開催する予定に  
しております。多くの会員各位の御出席を期待いたします。

開催日：昭和58年6月2日(木) 9:00~17:00

場所：九州大学同窓会館附属小講堂  
(九州大学医学部キャンパス内)

主題：「職業がん」  
最近行われた、あるいは行われている職業がんの疫学的研究を発表していただき、その問題点を討議する。

演題募集等：会員から職業がんに関する一般演題を募集  
(締切日：昭和58年2月28日)するとともに、  
特定の研究者に講演を依頼する。

以上

# 日本癌学会シンポジウム(予告) がん研究における疫学の役割と意義 ——年齢要因を中心として——

昭和57年12月4日(出)  
於：経団連国際会議場

世話人  
平山 雄(国立がんセンター)  
藤本伊三郎(大阪府立成人病センター)  
青木 国雄(名古屋大学予防医学)

## プログラム

### 第1部

1. 記述疫学におけるがん発生と年齢 藤本伊三郎
2. 疫学面からみた人がんの潜伏期間 栗原 登(広島大原医研)
3. 喫煙開始年齢と発がん 平山 雄
4. 放射線被曝年齢と発がん 加藤寛夫(放射線影響研)
5. 職業性発がん曝露年齢 西本幸男(広島大内科)
6. 乳がんにおける年齢要因 広畑富雄(久留米大公衆衛生)
7. 肝がんにおける年齢要因 稲葉 裕(順天堂大衛生)

### 第2部

1. DNA Repairと年齢 武部 啓(京大放射線生物センター)
2. 実験発がんにおける年齢の意義 横路謙次郎(広島大原医研)
3. 人の臓器の発育と環境要因 青木国雄

第3部 討 論 司会 平山 雄

\*

(特別発言) 発がん年齢要因 ——厚生省がん研究助成金がんの疫学的研究班成績より

富永祐民

## 関連学会だより

### 第2回 産業医科大学国際シンポジウム “産業医学における疫学”

日時 昭和57年10月24日(日)、25日(月)  
場所 産業医科大学 北九州市八幡西区医生ヶ丘1-1  
主催 産業医科大学 学会長 土屋健三郎  
事務局 〒807 北九州市八幡西区医生ヶ丘1-1  
(連絡先) 産業医科大学 公衆衛生学教室 吉村健清  
TEL 093-603-1611 (内) 2353

\* \* \*

上記会議に先立って、IARCの疫学研修コースが開かれる。  
講師は世界各国の職業がんの疫学専門家である。

INTERNATIONAL AGENCY FOR RESEARCH ON CANCER  
International Course on the Epidemiological Approach  
to Occupational Cancer  
Kitakyushu, Japan-12-22 October 1982

会員の皆様からの御投稿をおまちしております。

(編集責任者 青木 国雄)

## 新刊だより

THE UICC SMOKING CONTROL WORKSHOP  
S. Tominaga & K. Aoki eds.  
The University of Nagoya Press 103 pages,  
July, 1982 ¥2,500  
(喫煙対策についての国際会議録、35か国参加)

\* \* \*

CANCER PREVENTION IN DEVELOPING COUNTRIES  
K. Aoki, S. Tominaga & T. Hirayama eds.  
The Proceedings of the First UICC  
Conference on Cancer Prevention  
in Developing Countries-Nagoya, 1981  
The University of Nagoya Press 600 pages,  
To be published in December 1982

## 日本がん疫学研究会

事務局 〒464 名古屋市千種区田代町  
愛知県がんセンター疫学部気付  
Tel. 052-762-6111  
振替口座 名古屋 1-37001